

第1章 1997年度岡山大学構内遺跡調査報告

第1節 調査の概要

当センターにおいては大学構内における掘削を伴う工事に際し、事務局施設部企画課を通じて事務手続きを行ったうえで、発掘調査・試掘調査・立会調査にわけて調査を実施している。

これまでのところ、その調査の対象は津島地区と鹿田地区とが中心になっている。特に鹿田地区は周知の遺跡（鹿田遺跡）として、掘削を伴う工事に際し、届出を提出した上で対応を行っている。また、津島地区においても、新たな遺跡の確認が進んでいることから、遺跡名称を「津島岡大遺跡」と総称し、届出の有無にかかわらず、少なくとも立会調査を実施している。今年度は三朝地区で新たに遺跡を発見するに至り、発掘調査を実施した。遺跡の名称は小字名をとって「福呂遺跡」としている。

1997年度は、発掘調査3件、試掘調査2件（三朝地区、鹿田地区）、立会調査31件（津島地区17件、鹿田地区3件、三朝地区10件、東山地区1件）を実施した。そのうち発掘調査・試掘調査については本章でその概要を述べ、立会調査の詳細については表1（p.16～17）に記す。

第2節 発掘調査

1 福呂遺跡第1・2次調査（固体地球研究センター実験研究棟新営工事に伴う発掘調査 三朝）

岡山大学三朝地区は鳥取県東伯郡三朝町大字山田に所在する（図1）。三朝地区は三朝町を流れる三徳川の北岸に位置しており、河岸段丘上に医学部付属病院三朝分院や、固体地球研究センター研究棟などの主要な施設が建設され、北側の丘陵上にはリハビリ用散策路が設けられている。今回実験研究棟が新営される地点は、この河岸段丘と北側の丘陵の傾斜変換点付近から丘陵裾部にあたり、実験研究棟新営予定地の南側には附属病院三朝分院がある。

a. 調査に至る経過

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターでは三朝地区において、1989年5月に分布調査を行い、施設内及び周辺区域での埋蔵文化財の有無を確認する作業を行った（註1）。分布調査は地表面の観察のみであったため、遺跡を確認することはできなかった。また、敷地内は造成のた



図1 福呂遺跡の位置（星印の地点）

めの盛土等による改変が著しく、地表面での遺跡の確認は困難な状況であった。

1997年度になって、固体地球研究センターにおいて新営実験研究施設の建築計画が具体化した。1997年5月に新営予定地において本体建設工事箇所における根伐工事に立ち会ったところ、弥生土器片を採集するに至り、遺跡の存在する可能性が明らかとなった。また、壁面観察から遺物包含層を数面確認し、また遺構等も良好に残存していることが明らかとなったため、遺跡が存在することを確認した。すでに、本体工事部分については、西側の約半分が掘削されていたが、関係機関と協議した結果、残

存する部分について発掘調査を行うことになった。また、本体工事以外に施設周辺においても付随する工事があり、渡り廊下の基礎及びスロープ部分について発掘調査を行った。

なお、調査にあたっては鳥取県教育委員会、三朝町教育委員会に支援を頂いている。

b. 調査の経過

調査は遺跡を確認した翌日の1997年5月10日から5月20日の期間で実験研究棟部分（A地点）の調査を行い、その後は工事の工程に合わせて付帯工事部分の発掘調査を行った（図2）。1997年7月28～31日には既設の研究棟と新営の研究棟を結ぶ渡り廊下基礎部分（B地点）について発掘調査を行った。手続きの関係上、以上の2期の発掘調査を合わせて第1次調査としている。また、1997年11月26日から12月5日まで新営研究棟本体南側のスロープ設置部分（C地点）について発掘調査を行った。この期間の発掘調査を第2次調査としている。調査は第1次、第2次ともそれぞれ調査員2名が担当した。調査面積は第1次調査の実験研究棟部分が244㎡、第2次調査が120㎡である。

c. 調査の成果

（1）地形と層序

遺跡は三朝町を流れる三徳川の北岸に位置している。遺跡は北から南に山稜がせり出して形成される舌状台地の裾部に立地する。調査地点は南側を水路に切られており、小段丘状の高まりとなっている。北側の山稜には調査地点の北東でやや深い谷が入る。この谷から流入する砂土による地形の改変は著しい。現地表の標高は、台地上部の本体工事部分で標高約52m、南側

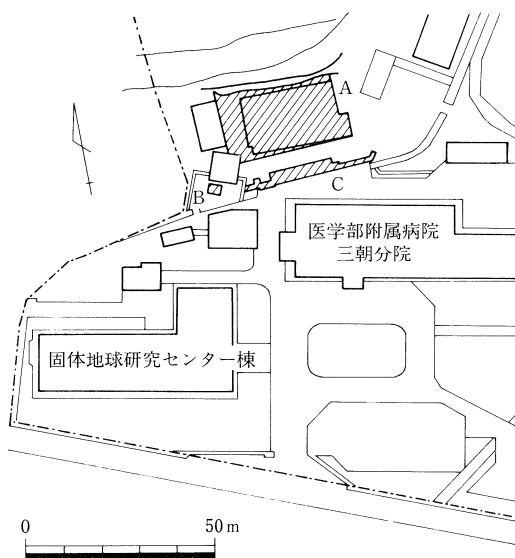


図2 福呂遺跡第1・2次調査地点の位置

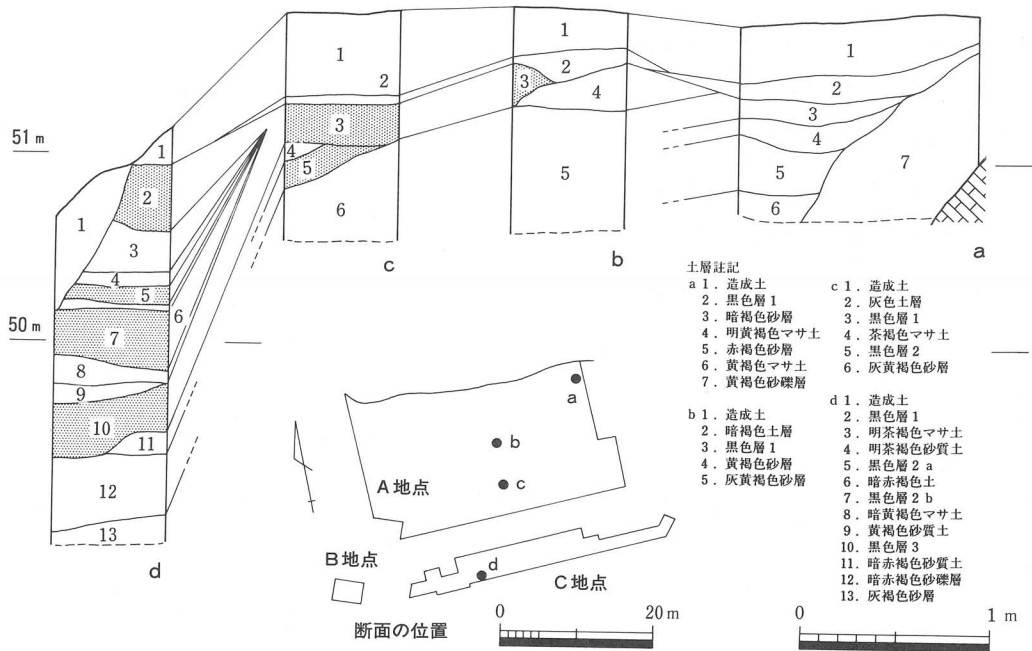


図3 土層断面模式図と断面の位置

の斜面下で標高約50mである。

層序は、斜面堆積や度重なる山砂等の流入土の影響のため、地点により変化が激しい。そのため、以下で示す各地点間における堆積状況は異なっており、層名が同じ場合でも各地点間で対応していない。ここでは基本的な層序について解説する。

A地点南側（図3－c） 第1層は暗褐色土の造成土である。ブロックや炭などを含む近代の層である。第2層は上位の黒色層（以下、「黒色層1」と略称）であり、中世の遺物を包含する。第3層は明黄褐色マサ土層である。しまりがなく、崩れやすい。谷からの流入土と考えられる。第4層は下位の黒色層（以下、「黒色層2」と略称）であり、弥生時代の遺物を包含している。この第4層の下位においては、北側で縄文時代早期末の遺物を包含する黄褐色マサ土層が確認されているが、斜面側ではこの層は収束している。第5層は、暗褐色の小砂礫層が堆積しており、遺物等を包含していない。

C地点（図3－d） 第1層は暗褐色土の造成土である。ブロックや炭などを含む近代の層である。第2層は黒色層1と呼称する層であり、中・近世の遺物を包含する。第3層は明黄褐色マサ土層である。しまりがなく、崩れやすい。谷からの流入土と考えられる。第4層は黒色層2 aと呼称する層であり、中世の遺物を包含している。南西側ではこの下に第5層の赤褐色土

の硬化した面が見られる。この下には第6層の黒色層2b、第7層の黒色層2cと呼称する層が堆積し、中世から古代末の時期の遺物が出土している。南西側の深い部分では、さらに第8層の黒色層3がみられ、宋銭が出土していることから古代以降の時期に堆積したことがわかる。この層の下部には遺物等を包含していない砂礫層が堆積している。

(2) 遺構・遺物

縄文時代早期末の時期の遺構は、A地点で小型の地床炉1基と埋設土器1基を検出した(図4)。地床炉は直径が約50cmと小さいものの、周囲からは多量の土器片がつぶれた状態で出土し、黒曜石の剥片や磨り石片も出土している。埋設土器は、ほぼ完形の深鉢を直立させており、中にサヌカイト製のスクレイパー1点を納めていた。土器は、条痕文地に体部中位より上に縄文を施し、口縁部下に竹管状工具による押圧をもつ突帯をめぐらしている。山陰地域の菱根式系の土器であろう。

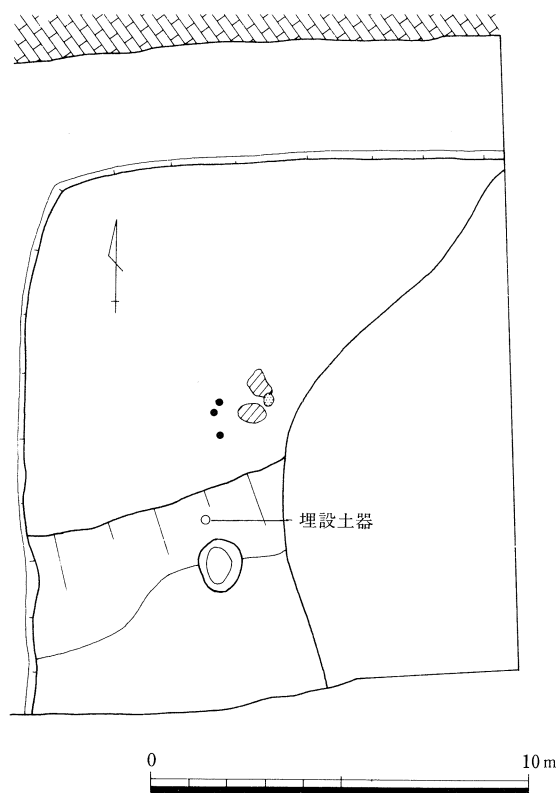


図4 A地点縄文時代早期遺構平面図

- 黒曜石剥片
- 地床炉
- 土器集中部

のスクレイパー1点を納めていた。土器は、条痕文地に体部中位より上に縄文を施し、口縁部下に竹管状工具による押圧をもつ突帯をめぐらしている。山陰地域の菱根式系の土器であろう。

弥生時代中期の遺構・遺物は、大形の土坑1基、中・小形の土坑・ピット8基を検出した。大形土坑は、直径が1mを越え、深さも現存で約1m以上ある。中には礫が入り、それに混じって壺や甕などの大形の土器片や石鍬等を検出した。時期は弥生時代中期末に相当する。

中世以降の遺構・遺物は、A地点では土坑とピットの他に、細い溝を2基検出した。須恵系陶器片や土師質土器が多く出土している。

C地点では古代以降の遺構と遺物を検出した(図5)。弥生・縄文の包含層は確認されなかった。黒色層3では古代末から中世の小型の土坑やピットを数基検出した。これらのピット内からは須恵器や土師器の破片が出土した。その他、土坑内から、銅銭「太平通寶」が1点出土している。黒色層2では、土坑やピットが群集していた。土坑の中には、石鍋、土師質土器の鍋や、須恵器の破片、また完形の土師質土器の小皿を埋納しており、埋葬に関する可能性

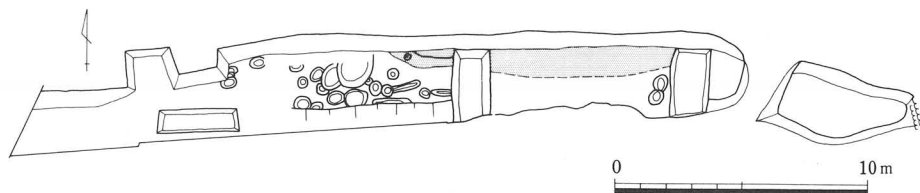


図5 C地点中世遺構(黒色層2)平面図

がある。

C地点では黒色層1で、近世のピット等を数基検出した。

その他、包含層からは突帯文土器片、弥生時代前期の壺と甕片、古墳時代前期の土師器甕片、古墳時代の須恵器、中世の青磁片等、各時代・時期の遺物が出土している。

d. まとめ

三朝町ではこれまで数回の発掘調査が行われ、縄文時代中期、弥生時代中期、古墳時代中期の遺跡の存在が明らかにされており、また、分布調査によって弥生時代以降中世までの散布地と古墳時代後期の古墳群が存在することが知られている。しかし、岡山大学三朝地区が所在する山田周辺では古墳時代後期の山田1号墳の存在が知られるのみであった。

今回の2次にわたる調査では、縄文時代早期から近世にいたるまでの遺構を検出し、また多くの遺物の出土も確認した。特に縄文時代早期に遡る遺構はこれまで町内で確認されたものでは最も古く遡る人間活動の痕跡であり、また出土した土器には九州の轟式の影響がみられ、九州や鳥取県西部の遺跡との関係を考えることが可能となる資料であることは重要である。弥生時代では中期後半の遺構とそれに伴う遺物を検出したが、包含層からはこの地域でこれまで知られていない前期の土器も出土している。中世では土器や石を埋納した墓地と考えられる土坑群を検出した。この土坑の中から出土した石鍋の存在は三徳川流域の中世史を考えるうえで重要である。石鍋は長崎県を中心に瀬戸内沿岸や畿内、鎌倉に分布がみられ、日本海沿岸地域では出土例が極めて少ない。今回出土した石鍋は三仏寺の寺伝に源頼朝が三徳山に寺領3000石を与えたとの記事にあるように、鎌倉幕府との関係の中で搬入されたものと考えられよう。頼朝が与えた寺領がどの地域であったのかは不明であるが、今回の調査成果から三徳川流域がその候補となる可能性が高くなったと考えられる。

今回の調査は三朝町の地域史を考えるうえで重要な資料を提供したといえるが、今後は列島内でこの地域の位置づけを行うことが必要となるであろう。なお、本調査の資料は現在調査途上にあり、本報告の内容は暫定的なものである。

(野崎貴博)

註

- (1) 『岡山大学構内遺跡調査研究年報』7 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1990年

2 鹿田遺跡第7次調査（医学部校舎新営工事に伴う発掘調査 鹿田BR55～BX61・BY56～57区）

a. 調査に至る経緯

老朽化の進む医学部基礎医学棟の新営が、既存施設の南側に広がる駐車場に計画され、845㎡程度の面積が埋蔵文化財の調査対象範囲となる可能性が提示された。それを受けて、12月10日に試掘調査を実施した（詳細は第1章第3節参照）。

同調査の結果からは、予定地周辺の調査データ（南側の動物実験棟、西側の鹿田遺跡6次調査に当たるアイソトープ総合センター）も参考にした上で、比較的遺構密度の高い中世包含層とやや希薄な状態を示す弥生～古墳時代の包含層の存在が想定された。

最終的に調査面積は829㎡となり、調査員2名が、発掘調査期間約5ヶ月の予定で担当することとなった。

b. 調査の経過

1998年2月16日から造成土の除去を開始したが、作業が進むにつれて、旧建物の基礎が姿を見せ始め、予想外に広い面積を占める堅固なものであることが明らかになってきた。当初、基礎撤去に伴う遺跡破壊を鑑み、大形の基礎部分は残して、調査終了後に対処する方針であったが、同建物に平行して同規模の基礎を有す旧建物の存在が確認された段階で、基礎を残しての調査は極めて困難となる状態に陥った。北側部に関しては、すでに周囲の造成土除去が大方終了していたために機械の導入ができず、撤去は不可能であった。その基礎は、最終的に調査区の北1/3程を占める結果となる。一方、南側の基礎については、極力周囲の破壊を避けるために圧搾機を導入して撤去することとし、準備のために造成土除去作業は2月23日から一時中断となった。再開は3月9日からで、3月17日に完了した。

本格的な発掘調査の開始は1998年2月26日である。調査区北側の可能な範囲から作業を進めたが、調査区分断に伴う作業の繁雑さや基礎撤去に伴う掃除に多くの時間が割かれ、軌道に乗るのは約1ヶ月後、造成土除去が完了した後の3月後半であった。

その後、近代の面を整え、一部で中世層上面への下げを行った状態で、3月31

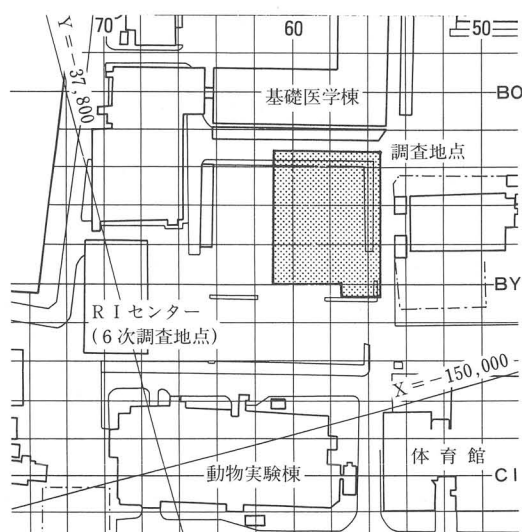


図6 調査地点（縮尺1/2,000）

日に97年度の調査を終了した。

c. 調査の概要

(1) 層序 (図7)

現在の地表から深さ約1 mまでは、医学校敷地造成時（大正11年3月）の盛り土である（1層）。その直下の2層は淡灰色と暗灰色の粘土や灰色砂等が、ブロック状あるいはラミナ状に堆積する。同層は調査区全域を覆うように広範囲に厚く認められ、大規模な洪水に関連した土層の可能性が高い。3層は淡灰色の水田土層で一部分では二つに細分できる。時期は出土遺物から近代の範囲を考えている。4層は緑灰色の締まった土層で、中世（鎌倉～室町時代）の包含層をなし、本来その間にあるはずの近世土層は削平されているようである。同層は二層に細分される。上層に当たる4 a層は淡緑灰色砂質土、下層に当たる4 b層は暗緑灰色土を呈す。いずれも炭化物や遺物を多く含む土層で、当時の集落の存在を強く示す。古代層は確認できなかった。5層は褐色を強めた砂質土で古墳時代初め頃の包含層である。6層は黄褐色土で基盤層をなす。

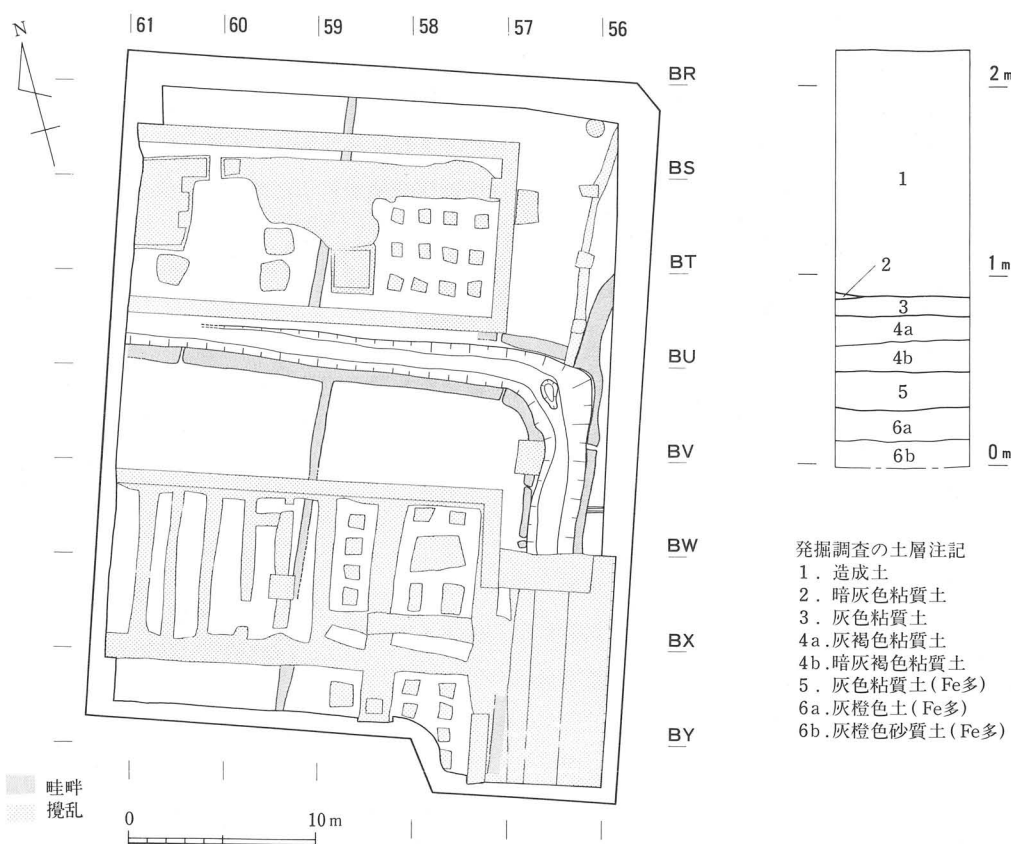


図7 鹿田遺跡第7次調査遺構全体図・土層断面図 (縮尺1/400・1/40)

(2) 調査の概要 (図7)

1997年度内では、面的な調査成果としては、造成土除去面に当たる近代の面(3層)で検出した耕作関連遺構の調査が中心である。それ以外では、一部において近世土坑の調査、あるいは中世層(4層)上面におけるピット群の調査に入った。主要な調査は4月以降である。

3層では、調査区中央部をL字形に走る溝とそれにとりつく水田畦畔が遺存していた。方向は、鹿田キャンパスの敷地の軸に沿っている。溝は幅2～3m、深さ1mの規模で、両縁には幅50cm程度、高さ5cmのしっかりした畦が附属する。水田畦畔は幅約30cmで、高さは約5cmが確認された。それぞれの水田は水口を溝側に有している。

時期的には新しいものであったが、鹿田遺跡の調査で耕作関連遺構の確認は初めてであり、集落と生産域の関係を遡って考える上でも貴重な資料となった。

4月以降は、調査は数基の近世土坑に続き、大規模な溝や多数の柱穴そして井戸などで構成された中世の遺構群に移り、最終的には古墳時代初頭に属する竪穴住居・掘立柱建物・井戸・土坑・溝などの調査を終え、8月6日にすべての作業を終了した。4～8月の詳細については次の年報で報告する。

(山本悦世)

第3節 試掘調査

本年度は鹿田地区において1件、三朝地区において3件の試掘調査を実施した。鹿田地区では、基礎医学棟新営予定地の調査、三朝地区では実験研究棟新営予定地関連の調査を行った。以下に概要を記す。

1 固体地球研究センター実験研究棟新営工事に伴う試掘調査

a. 調査の経過

1997年5月に、固体地球研究センターの新営実験研究施設予定地において、本体建設工事箇所における根伐工事の際に、遺跡の存在が明らかになった。そして、遺構等が良好に残存していることが判明したため、関係機関との協議の結果、残存する部分について発掘調査を行うことになった(第1章第2節)。また、本体工事以外にも施設周辺において付属する工事があり、特に渡り廊下の基礎及びスロープ部分等について発掘調査を行うことになった。

この渡り廊下の基礎及びスロープ部分について、包含層の状況等の情報を得るために試掘調査をおこなった。

また、工事に伴う電気ハンドホール埋設管に関連する試

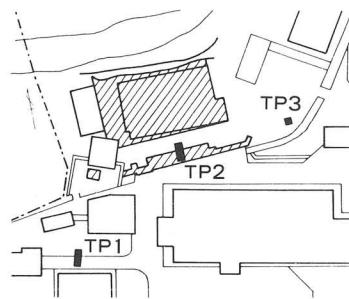


図8 福呂遺跡試掘調査 調査地点位置図
(縮尺1/3,000)

掘調査も行った(図8)。調査については渡り廊下の基礎部分を7月3日、スロープ部分は7月29日、電気ハンドホール関連工事の部分を7月30日にそれぞれ行った。調査員はいずれも1名である。

b. 調査の概要

(1) 渡り廊下の基礎部分(図8, 9・TP1)

渡り廊下の基礎部分の試掘坑は、工事部分の南北軸線上の東側に設定した。規模は3×3mである。現標高は、約49.5mで、ゆるやかに南側に向かって傾斜する。

1・2層は造成土で、合わせて厚さ約70cmである。3層は昭和14年の旧研究所に関連する石

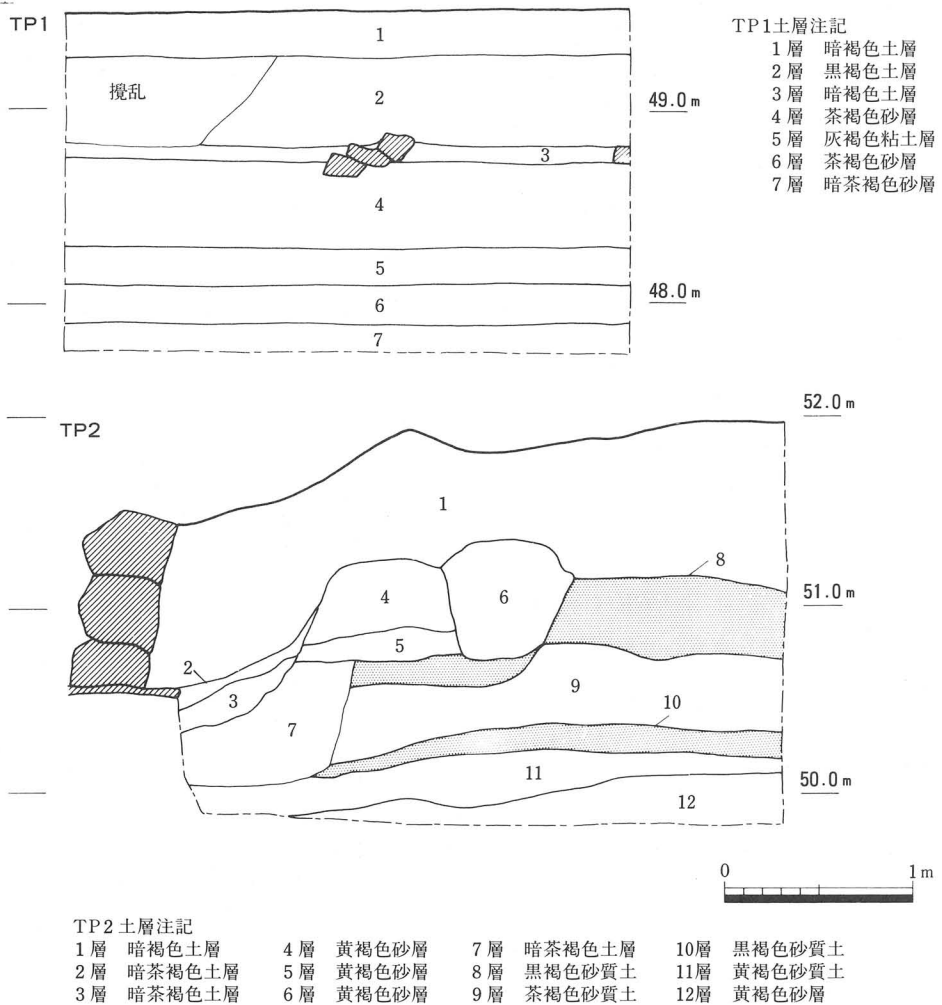


図9 福呂遺跡試掘調査土層断面図

敷きと、その土止めの層であり、厚さ約10cmである。4層は茶褐色砂層である。遺物等がなく時期は不明である。5層は暗茶褐色の粘質土層で、幕末の陶磁器を含む水田層と考えられる。6・7層は黄褐色の砂層であり、遺物等を含まない。マンガン等が縞状にラミナ状堆積を呈している。

(2) スロープ部分 (図8, 9・TP2)

本調査については、新営実験研究棟本体の南側に設営されるスロープのほぼ中央付近に、軸線を南北に合わせ設定した。南側については、水路の護岸石組みまでを範囲とし、規模は約4m×1.5mである。

1層は造成土であり、2層・3層・7層は石垣の裏込めに相当する。4層から6層は、近代の陶磁器を含む黄褐色砂層である。8層は黒色の砂質土であり、第1次調査の黒色層1に相当する。中近世の遺物を含む。9層は茶褐色の砂質土である。遺物等は含まない。10層は黒色の砂質土であり、1次調査の黒色土第2層に相当する。11層は黄褐色の砂質土層であり、山砂の堆積と思われる。11層以下はラミナ状堆積が顕著である。

(3) 電気ハンドホール関連工事の部分 (図8・TP3)

本調査の地点は、本体工事部分の東南側に位置し、地表から約1.5m掘削した。規模は約3×4mである。既設の配管等が縦横に埋設されており、攪乱のみで包含層は残存していなかった。

c. まとめ

三朝地区では、第1次調査の行われた本体工事部分及び周辺の丘陵舌部の高い部分が、遺跡の中心であり、さらに東西に広がっている可能性がある。病院との境に流れる水路を境にこの丘陵はとぎれるが、スロープでの試掘では包含層が傾斜をもちつつ、石垣の下部方向へもぐりこんでいるので、病院北側の平坦な部分についても注意する必要がある。なお、第1研究棟の周辺については、渡り廊下の試掘結果から本来水田か湿地であったことが判明した。

(小林青樹)

2 医学部校舎新営工事に伴う試掘調査

a. 調査に至る経緯

老朽化の進む医学部基礎医学棟（通称）新営計画の中で、約800㎡程度の面積が埋蔵文化財の調査対象範囲となる可能性が1997年秋に提示された。建設予定地は現基礎医学棟の南側に広がる駐車場で、動物実験棟の北約30m、鹿田遺

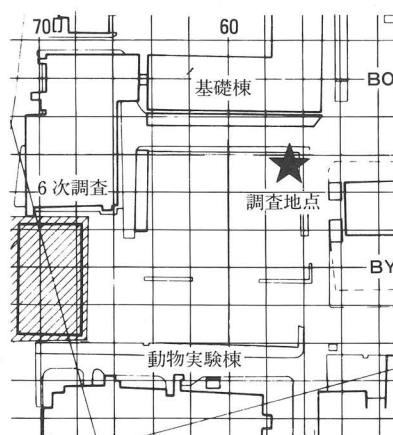


図10 試掘調査地点 (縮尺1/2,000)

跡第6次調査地点の東約35mという位置にある。すでに、両建物建設の際に中世を中心とした遺跡の存在が確認されており、本地点に少なくとも中世の遺跡が広がることは確実視されていた。

こうした状況から、中世包含層の厚さと弥生時代～古墳時代前半段階の遺構の存在を確認するために試掘調査を行うことになった。西～南側に関しては、前述の調査データを参考にできることから、試掘地点は予定地の北東部隅に1箇所のみとした(図10)。調査は12月10日に調査員1名が実施した。

b. 調査の概要

試掘坑は上面を一辺3mとした。旧建物の基礎に当たったことも影響し、掘り下げに従って随時その面積を狭め、最終的には1×1.5mの範囲で断面観察を行い終了した。最下面のレベルは、地表から-2.2mに位置する。その結果、造成土の厚さが1.5mに及ぶことと4枚の包含層(図11: 2～5層)を確認した。3・4層では中世の遺構がそれぞれの上面で認められ、一定レベル以上の密度の濃

さを示した。5層では弥生～古墳時代と判断される微細な土器片が僅かに出土したのみで、遺構密度はやや希薄であると予想された。こうしたデータをもとに、発掘調査の計画を進め、2月から調査に入った。土層などの詳細は発掘調査の項で前述しており、ここでは省略する。

(山本)

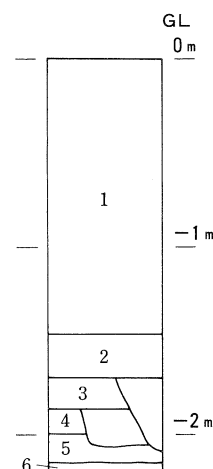


図11 土層断面図
(縮尺1/40)

1. 造成土攪乱層
2. 淡灰色粘土層(軟質)
3. 淡青灰色粘土(中世土器細片)
4. 暗(茶)灰色シルト層(炭, Mu)
5. 暗灰褐色土(炭, Mu)
6. 淡黄灰色土(Mu, Fu)

第4節 立会調査

(1) 津島地区(図16・表1)

津島地区の立会調査は事業別では、17件、計17カ所で行った。大半の調査は掘削深度が浅く造成土内で終了した。ここでは、掘削深度の深かった調査⑬・⑭・⑮について以下に詳細を記す。なお、その他については表1に明記した。

調査⑬は、南北道路のガス管埋設工事に伴う立会調査で、大学敷地内について連続して行った。掘削深度約1.5mで中世に相当すると考えられる水田(粘土層)を確認した。また、その他の地点でも近世の包含層を確認した。

調査⑭は、福利厚生施設新営に伴うその他工事のうち、共同溝新設に伴う工事の立会調査である。この工事は、すでに終了している第14次調査地区に接続する形で行われ、既調査範囲と新設部分との間の未掘部分について調査を行った。この部分の土層については、調査の結果第14次調査と同じ状況を呈していたことを確認した。

調査⑯は、岡山市教育委員会による南北道路における雨水管埋設工事（堅坑）に伴う立会調査である。この調査は、原因者が岡山市であるが、工事が大学敷地内であるため、工事地内の埋蔵文化財について関係者の協議の結果、岡山市文化課による調査に大学が立ち会うことになった。調査は、3.35m掘削がされ堅坑地点における土層及び遺構等の状況が確認された（図12）。この地点では、黒色土が確認されなかったが、中世等の遺構が確認され洪水砂が厚く堆積していることから、河道が確認された。

（2）鹿田地区（図17・表1）

鹿田地区における立会調査は、事業別にみると3件、3箇所であり、いずれも造成土内で終了した。

（3）三朝地区（図18・表1）

三朝地区における立会調査は、固体地球研究センター実験研究棟新営その他工事に関するものが1件あり、10箇所について行った。調査⑩は、遺跡発見の契機となった立会であり、地表下約4mまで掘削した。調査⑪では、遺跡の状況を確認することができ、近世から縄文まで包含層があることが判明した。これら調査⑩・⑪の層序等については、第1・2次調査において詳述している（第1章第2節）。その他については、いずれも造成土内で終了している。

（4）東山地区（図19・表1）

東山地区における立会調査は、事業別に1件、2箇所についておこなった。

調査⑫は、教育学部附属小・中学校他の囲障改修工事に伴う立会調査である。1.2m掘削した。造成土の厚さは約79cmで、現地表から1.9m下で暗灰色粘土層である近世の水田層を確認した。出土した陶磁器から、江戸末期に相当すると考えられる。その他については、造成土内で終了した。

（小林）

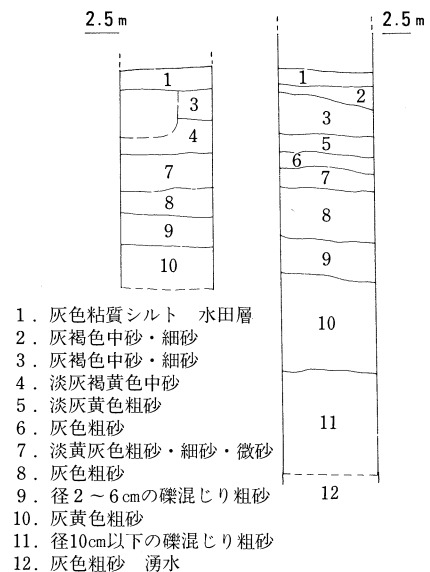


図12 調査⑯土層断面図 岡山市教育委員会

第5節 岡山大学構内における陸軍関連施設の調査

1 文・法・経済学部南庭園測量調査

a. 調査の経緯

岡山大学津島地区の敷地は旧陸軍が1919年（明治44年）に造営した陸軍駐屯地であり、戦後その敷地を引き継いだものである。戦後は旧陸軍の建物群も引き継いで使用しており、順次建

て替えを行って現在に至っている。旧陸軍の建築物は建て替え・取り壊しによって少なくなったが、一部は現在も利用されている。そのうち、文・法・経済学部棟の南には旧陸軍の造った建物群と庭園がある。この建物群が1998年度に取り壊されることが決まり、埋蔵文化財調査研究センターでは庭園と建物基礎を記録の対象として測量調査を行った。庭園と建物群基礎は測量図による記録、庭園の池の石組み、灯籠、築山上の立石については写真による記録、灯籠に刻まれた文字線刻や文様は写真・拓本による記録を行った。調査は1998年2月18,19日、4月7日、6月18日に断続的に行っている。

b. 測量調査の成果（図13）

今回の調査範囲の北側に位置する木造建物（現．職員組合事務所）は、旧陸軍工兵第一〇聯隊将校集会所である。庭園はこの将校集会所と一連のものである。庭園は南辺、西辺、東辺を高さ約70～80cmの土塁によって区画されている。この土塁は現在も岡山大学津島北地区の南辺を区画するかたちで約800mにわたって残っているうちの一部である。

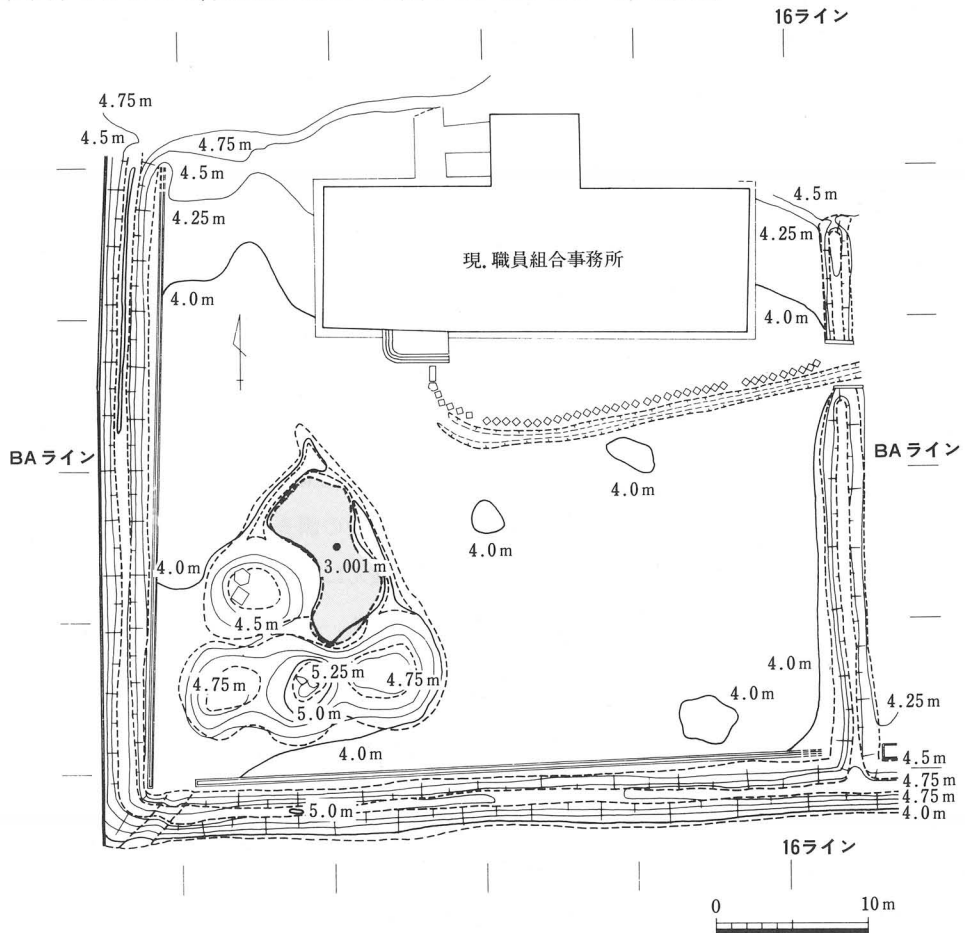


図13 庭園測量図

庭園の中央やや西よりには池が掘削される。池の平面形は瓢形を呈する。池の護岸は長辺約40～50cmの角柱状に加工した花崗岩3～4石を積んで頑強に構築している。この護岸は大学構内各所でみられる当時の排水路の護岸にもみられ、この当時の陸軍一七師団駐屯地内では一般的な工法であったことが推測される。

池の南には高さ約1.2～1.5mの築山が築かれる。この築山は4つの頂点をもつが、最も高い頂点には立石がみられる。立石は平板な石を縦位に用いており、平板な面を建物に向けるように立てられている。何らかの効果をねらって立てられたものと思われる。北側の築山の頂点には灯籠が立てられているが、現在、上部の籠部分は安全のため脇に降ろされている。灯籠の台部の円柱には「日支事変出征記念」と刻まれている。

東辺の土塁は北側で幅約1.5mにわたって切られ、集会所への入口となっている。この入口から西に向かっては、約50cm四方の花崗岩を並べてステップとし、建物への導線としている。このステップは角と角を接して配置されており、また、建物入り口に近い位置にのみ五角形の石を配して角度を変えており、その計画性の高さがうかがえる。また、東辺の土塁は駐屯地内で集会所の区画を明示するものであり、特権階級以外の者が立ち入ることを許さなかったことを物語るものであろう。

以上のような特徴にみるように、この一画は駐屯地内での特別な空間であり、また庭園は将校集会所からの美観をねらって計画的に造営されたものであることがうかがえる。（野崎）

b. 津島地区における戦争関連遺跡について

かつて津島地区には、第2次大戦前の敗戦時まで陸軍の広大な施設があった。その中枢である第一七師団の創設は明治40年であり、その後大正14年の軍縮を経て昭和へと配置等が変遷している。現在も津島地区内には当時の軍事施設が残存しており、多くは戦後に改修されているものの、往時の名残りを今も見ることができる。今回、旧将校集会所が取り壊されるにあたり、その庭園跡の測量調査と津島地区内にのこる旧陸軍施設の調査を行った。こうした一連の調査は、旧軍関連施設が「戦争遺跡」として近年学界で盛んに議論されている（註1）状況を考慮したもので、その現状を考古学的に記録するためである。

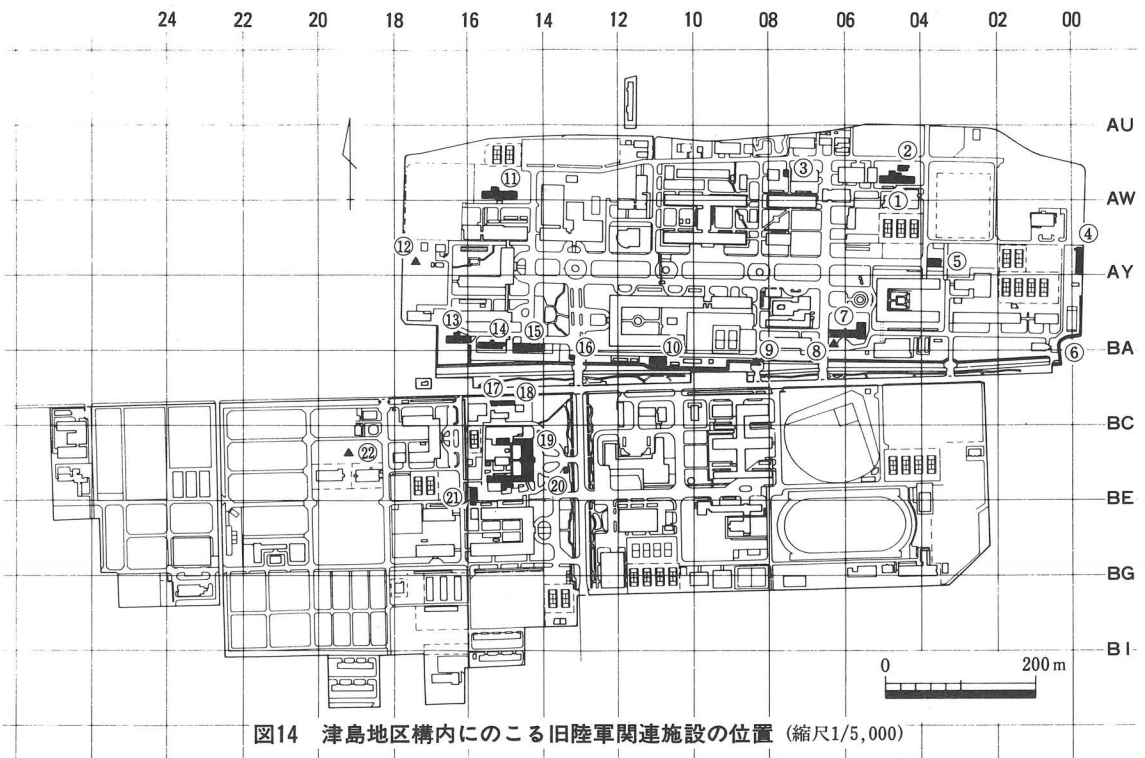
ここではまず、津島地区内に残存する戦争遺跡の主なものについて概観しておく（図14）（註2）。まず建物に関しては、現在大学事務局のある建物が第一七師団・歩兵第三三岡山連隊区の各旅団司令部跡にあたり、ほとんど往時の姿をとどめている（⑬）。門の脇には衛兵所の小建物も残る（⑭）。⑮は将校集会所跡で、庭園跡と石灯籠が残存する。将校集会所は、将校幹部の部隊内クラブであり、内装等に当時の建築様式の面影を見ることができる。この東の並びには、旧兵舎の面影をしのばせる連隊本部等の建物2棟が残る（⑯）。津島北地区の現在学生部の建物は、広島兵器補給所岡山分所の事務棟跡で内部の各所にかつての面影を残す（⑰）。なお、

この建物の南側には、昭和7年建立の砲身形をした軍人勅諭の記念碑が残る(⑧)。赤レンガ造りの建物をいくつか目にする事ができるが、それらも関連する建物であり、現在考古学資料館に使用されている建物は工兵連隊の浴場であった(⑪)。その他赤レンガの建物跡としては、現在放送大学岡山学習センターに使用されている兵器補給火薬取扱施設跡がある(②)。建物以外にも関連するものがあり、津島地区北西にはレンガ造りの残骸となっている箇所があるが、現在ゴミ焼却場になっているその場所は、鉄橋爆破演習場の跡であった。津島北地区の南東隅には、10数メートルの高さのコンクリート塀があるが、この高塀は法界院駅からの引き込み線で搬入された兵器をこの内側で荷ほどきをした場所で外部に対する目隠しであった。

以上のように、津島地区構内には戦争遺跡関連の建物等が多く残存している。構内において、日頃何気なく目にする古めかしい建物にも、それぞれにあまり知られない歴史的背景があることが再確認できた。近い将来、こうした遺跡は、再開発により消滅していく可能性がある。今回の調査は学界の動向などからみても意義のある作業であろう。今回調査を行ない得られた資料が、今後多方面において活用されれば幸いである。

今回、津島地区構内の戦争遺跡についてまとめるにあたり、実地踏査を含め文章の作成にいたるまで、西川宏氏の教示をえた。

(小林)



註

- 1 西川 宏・角田 茂「岡山市内に遺る戦争遺跡の爪痕」『明日への文化財』38号特集 戦後50年一戦争遺跡, 文化財保存全国協議会, 1996年3月。
- 2 本図は, 1998年5月13日, 岡山大学職員組合主催の野外学習会資料(角田 茂「岡大キャンパスとその周辺の戦跡を歩く」)掲載の図から作成した。

表1 1997年度調査一覧

番号	種類	調査地区	所属	調査名称	調査期間	掘削深度(m)	備考
①	発掘	三朝	固	実験研究棟新営その他工事 本体工事部分	5.10~20	2.0~2.5	調査面積244㎡。縄文早期・弥生中期・中近世包含層・遺構確認。〈福呂遺跡第1次調査〉
②	発掘	三朝	固	実験研究棟新営その他工事 渡り廊下基礎工事②	7.28	2.0	調査面積25㎡。1.0で中世層?。2.0で灰色粘土層。遺物なし。〈福呂遺跡第1次調査〉
③	発掘	三朝	固	実験研究棟新営その他工事 スロープ部分調査	11.25~12.5	2.8	調査面積120㎡。近世・中世・古代包含層・遺構確認。〈福呂遺跡第2次調査〉
④	発掘	鹿田	医	基礎医学棟新営	98.2.27~3.31	1.4	調査面積829㎡。近世水田確認。〈鹿田遺跡第7次調査〉
⑤	試掘	三朝	固	実験研究棟新営その他工事 渡り廊下基礎工事①	7.3	1.66	0.8で造成土。1.0でまさ土。1.4でシルト質の層。以下砂層がラミナ状に堆積。遺物なし。
⑥	試掘	三朝	固	実験研究棟新営その他工事 スロープ部分工事③	7.29,30	2.1	黒色層2層確認。
⑦	試掘	三朝	固	実験研究棟新営その他工事 電気ハンドホール工事⑥東	7.3	1.5	造成土内。
⑧	試掘	鹿田	医	基礎医学棟	12.1	2.2	中世・弥生包含層確認。
⑨	立会	三朝	固	実験研究棟新営その他工事 擁壁部分	4.3	0.5	斜面部分にトレンチ3カ所。地山確認。
⑩	立会	三朝	固	実験研究棟新営その他工事 根伐工事部分	5.7	4.0	GL-1.5mで包含層確認。弥生土器片採集。
⑪	立会	三朝	固	実験研究棟新営その他工事 本体工事部分	5.9	2.0~2.5	工事範囲内未調査のうちに1/2掘削済。壁面で遺構確認。
⑫	立会	津島北AV07	工	精密応用工学科別館給水管系統切り替え工事	5.18~5.20	0.5~0.9	既設工事内。
⑬	立会	三朝	固	実験研究棟新営その他工事 埋設配管工事⑤	7.2	0.8	遺物なし。造成土厚0.7。
⑭	立会	三朝	固	実験研究棟新営その他工事 機械工事⑨	7.2	0.8	造成土?。まさ土。
⑮	立会	三朝	固	実験研究棟新営その他工事埋設配管(給水管)工事⑧	7.2	0.3~0.5	造成土内。
⑯	立会	津島南BB13~BH13	事	南北道路ガス管埋設工事	7.17~8.19	1~1.2	中世層まで掘削。
⑰	立会	津島北BB12	事	公衆電話設置工事(岡山西アクセス系統設備工事)	7.18	縁石から0.5	面積2.4×2.4。造成土内。
⑱	立会	三朝	固	実験研究棟新営その他工事 電気埋設管路工事⑥西	7.31	1.0	1.0で中世層。包含層は東に向かい上面レベルが上昇。
⑲	立会	津島南	事	南北道路ガス管埋設工事	9.4	1.5	中世の粘土層検出。
⑳	立会	津島南BB12~BD12	事	南福利仮設電柱	9.24	0.7	造成土内。
㉑	立会	津島北AU03~AX02	環	環境理工学部新営に伴う仮設電柱工事	9.25	1.0~1.2	造成土厚0.9。明治層直下にまさ土の層確認。
㉒	立会	津島北AX02	環	環境理工学部工事用車両用スロープ工事	10.16	0.95	明治耕作土露出。
㉓	立会	津島北	環	環境理工学部新営に伴うその他工事 樹木移植	10.16	0.4~1.0	2カ所。建物南側サクラ3本。造成土内。建物北西側, 移植先, ポプラ3本, 造成土内。

番号	種類	調査地区	所属	調査名称	調査期間	掘削深度 (m)	備考
24	立会	津島南BC12	事	福利厚生施設新営に伴うその他工事 共同溝新設工事	11.11	2.0	GL-1.65。造成土厚0.8, 黒色土確認。近世・中世・古代, 古代の溝確認。
25	立会	三朝	固	実験研究棟新営その他工事 廃棄物置き場基礎工事⑩	12.5	0.75	暗灰色シルト質土まで掘削。
26	立会	津島南BF13	事	津島1号幹線(21区)雨水管埋設工事 堅坑	12.5	3.35	造成土厚1.0, 黒色土なし。遺構等確認。洪水砂厚く堆積。岡山市教育委員会調査。
27	立会	三朝	固	実験研究棟新営その他工事 排水管路④	1.13	0.6	マサ土, 遺物なし。
28	立会	三朝	固	実験研究棟新営その他工事 街灯設置工事⑦	1.13	1.2~1.5	造成土内。
29	立会	東山	教	教育学部付属小・中学校他囲障改修工事	2.5	2.2	造成土厚0.79m。GL-1.1mで水田確認。溝1条。
30	立会	鹿田	医	基礎医学棟新営に伴うその他工事 樹木移植	2.9	0.5~0.7	調査区北側列のサクラ移植, 移植先は5カ所いずれも造成土内。
31	立会	津島北BA03~02	教	岡山大学(津島)教育学部他自転車置き場取設工事 支障樹木移植 基礎工事	2.17・23	0.8~1.1 (樹木移植), 0.5 (基礎)	16本移植。いずれも造成土内。基礎も造成土内。
32	立会	津島北AV07	工	システム工学科排水管理設工事	2.19・3.6	0.5	造成土内。
33	立会	津島北AV06	環管	環境管理センター排水管理設工事	2.26・3.6	0.5	造成土内。
34	立会	津島南BF18~20	農	農学部道路敷設工事	3.16・18	0.5~0.9	造成土内。
35	立会	鹿田	医	自転車置き場基礎	3.17	0.5	造成土内。
36	立会	津島南AV07	事	壁支え支柱工事	3.17	0.6	造成土内。
37	立会	津島地区全体	事	津島構内外灯設備工事	3.18~31	1.2	明治~近世層まで掘削。
38	立会	鹿田	歯	歯学部看板設置工事	3.25	0.3	造成土内。
39	立会	津島南BC08	事	一般教育棟B棟配管工事	3.30	0.5	造成土内。

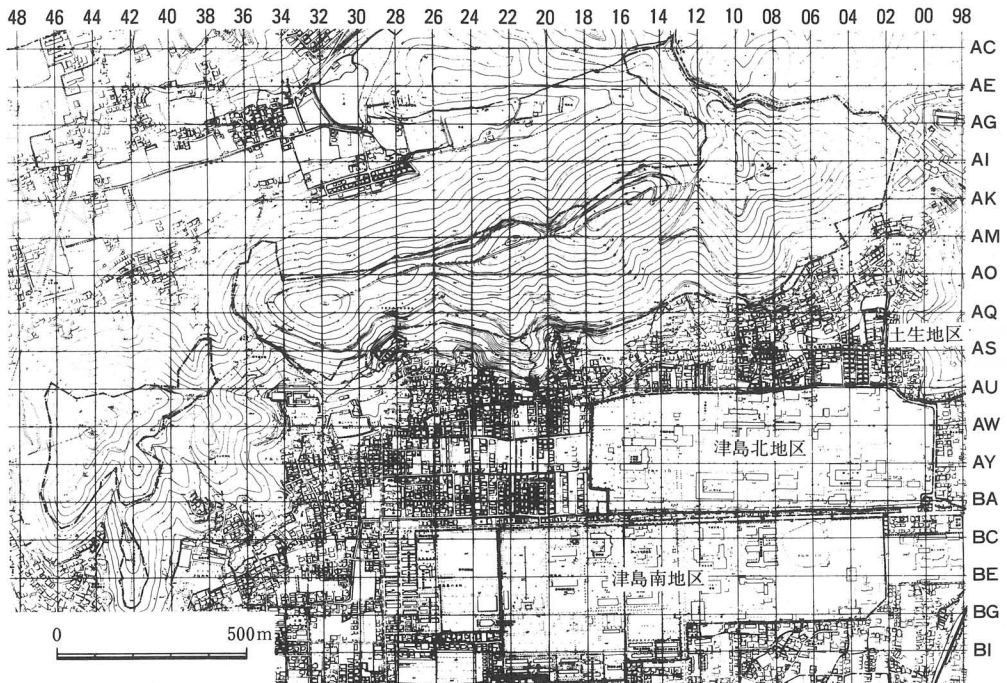


図15 津島地区全体図 (縮尺1/20,000)

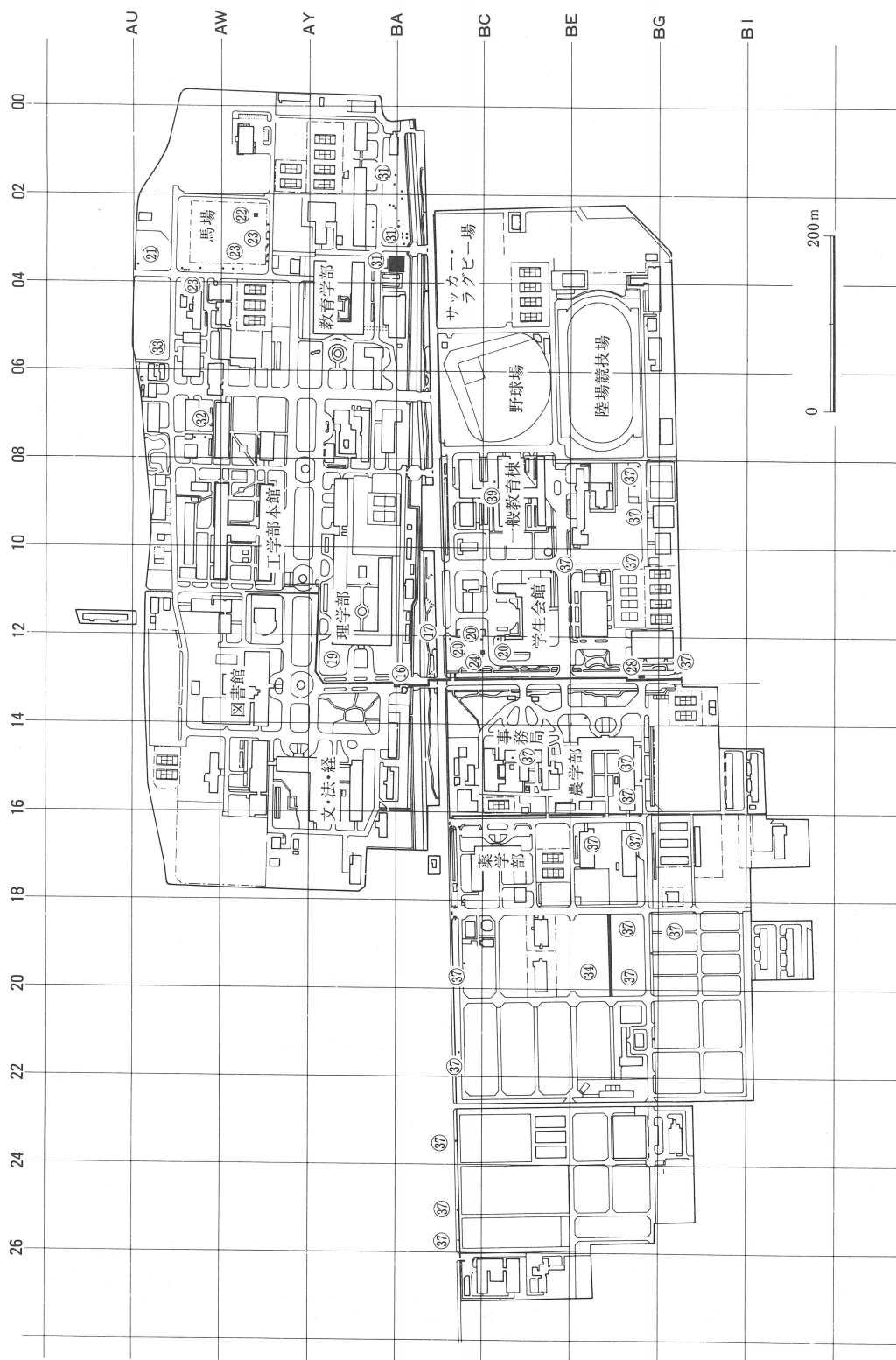


図16 今年度の調査(1) 津島地区 (縮尺1/7,500) ※黒塗りは試掘・立会調査、数字は表1に対応

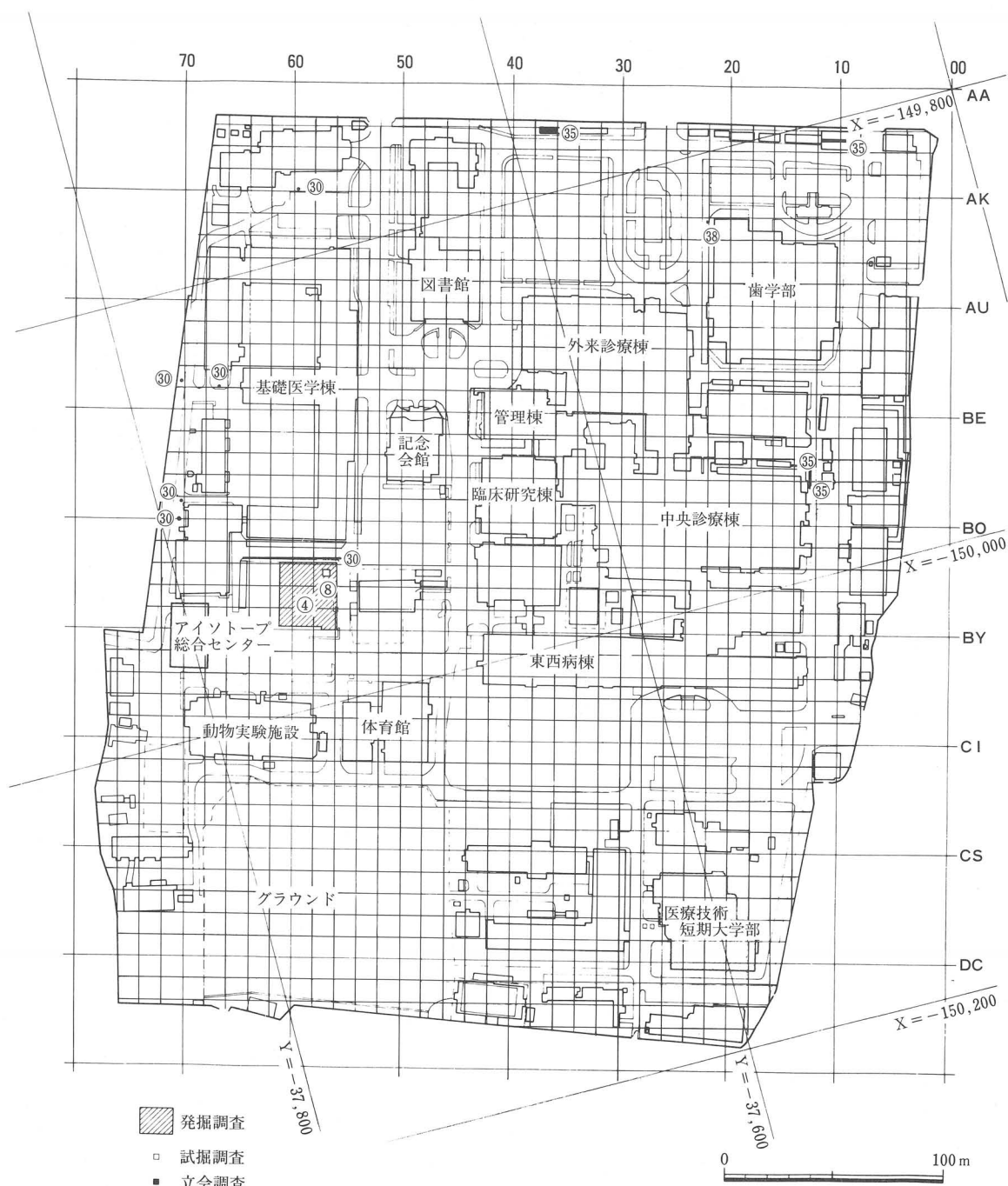


図17 今年度の調査(2)鹿田地区 (縮尺1/3,000)

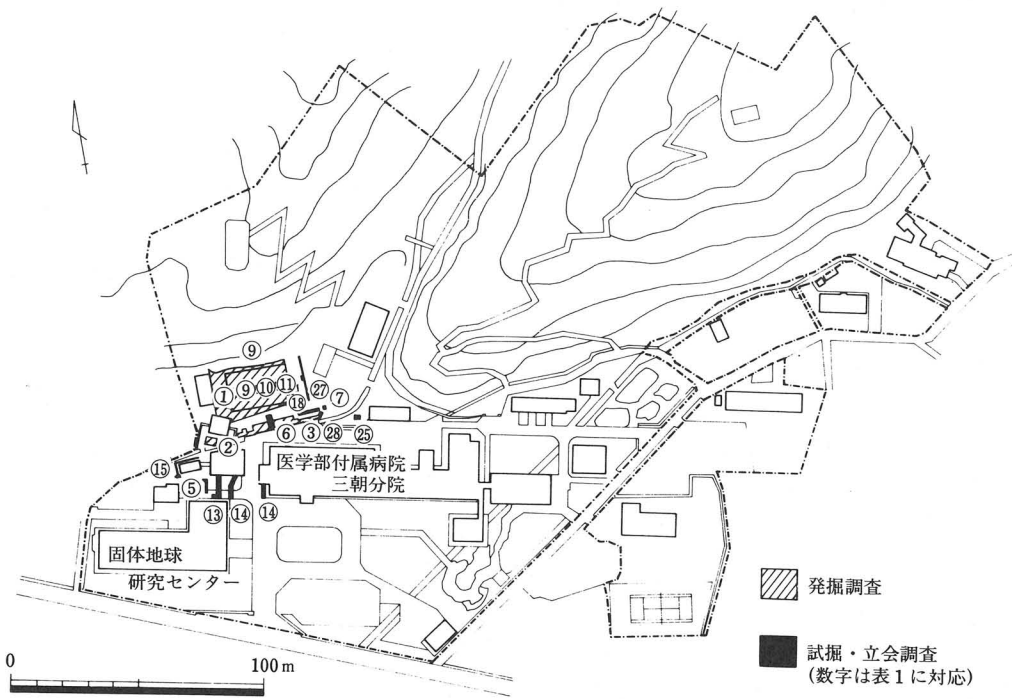


図18 今年度の調査(3) 三朝地区 (縮尺1/3,000)

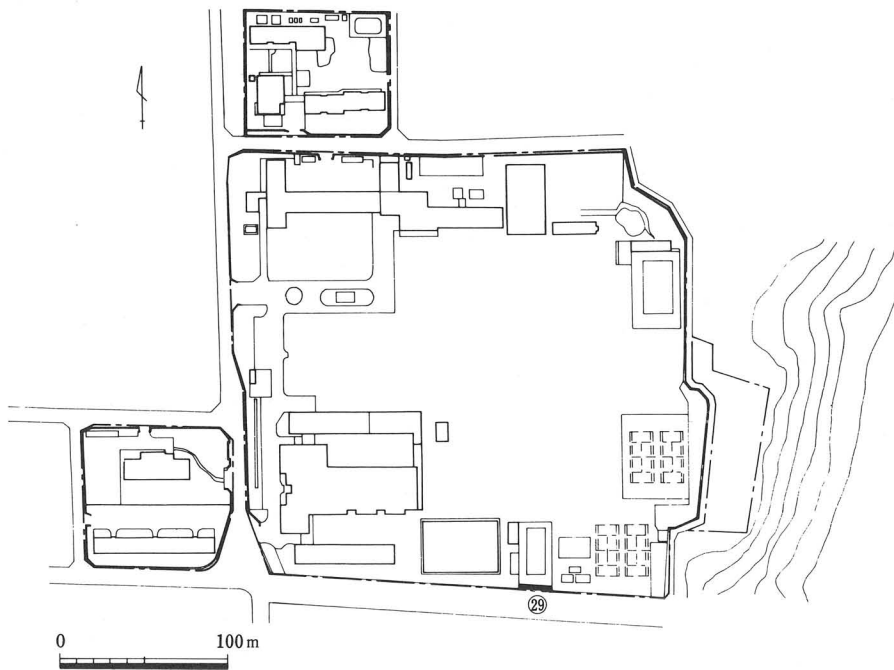


図19 今年度の調査(4) 東山地区 (縮尺1/4,500) ※数字は表1の番号と同じ

第2章 1997年度普及・研究・資料整理活動

1 資料整理

本年度は次の3件の発掘調査の資料整理を行った。

- ① 津島岡大遺跡第9次調査（工学部生体機能応用工学科棟）：報告書刊行
- ② 津島岡大遺跡第14次調査（福利厚生施設南棟）：報告書刊行
- ③ 津島岡大遺跡第10次調査（保健管理センター）：遺構図整理，遺物の実測

2 分析依頼

- ① 津島岡大遺跡第9次調査出土動物骨の鑑定…奈良国立文化財研究所 松井 章
- ② 津島岡大遺跡第9，12次調査出土種子の分析…岡山大学環境理工学部 沖 陽子

3 刊行物

- ① 岡山大学構内遺跡調査研究年報14 1997年11月 刊行
- ② 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第18号 1997年9月 刊行
- ③ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第13冊 1997年12月 刊行
- ④ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第14冊 1998年3月 刊行
- ⑤ 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第19号 1998年3月 刊行

4 調査員の活動

(1) 資料収集活動

小林青樹

縄文・弥生移行期における土器資料の調査：香川県埋蔵文化財センター他

弥生時代における絹を中心とした繊維組織の材質と技法に関する研究：国立歴史民俗博物館他

野崎貴博

北部九州の埴輪資料の実査：福岡市埋蔵文化財センター

前・中期古墳の踏査：島根県，福岡県

山本悦世

縄文・弥生移行期における遺物（土器・木器）の調査：愛媛県阿方遺跡

博物館の実態調査：滋賀県立琵琶湖博物館

(2) 学会・研究会参加等

小林青樹

考古学研究会総会（4月）、日本考古学協会総会（5月）、日本文化財学会（10月）他
野崎貴博

考古学研究会総会（4月）、日本考古学協会総会（5月）、全大協中・四国教研集会（6月）、古代学協会四国支部研究集会（9月）

山本悦世

考古学研究会総会（4月）、日本考古学協会総会（5月）、中四国縄文研究会（6月）

横田美香

考古学研究会総会（4月）、日本考古学協会総会（5月）、古代の土器研究会（11月）

(3) 研究発表他

小林青樹

「長野県小諸市氷遺跡の研究—中部高地における縄文時代晩期終末期の研究—」日本考古学協会 第63回総会（5月）

「縄文時代晩期終末期の土器の胎土分析—長野県小諸市氷遺跡の氷式土器の胎土分析」第14回日本文化財学会（10月）

野崎貴博

「岡山大学における埋蔵文化財問題の現状と課題」全国大学高専教職員組合中・四国教職員研究集会（6月）

「埴輪製作技法の伝播とその背景」考古学研究会例会（9月）

(4) 論文・資料報告

小林青樹

「岡山市八幡大塚2号墳の再検討」『古代吉備』第19集（共著）

「土器作りの専業製作と規格性に関する民族考古学的研究—フィリピンとタイの事例分析を中心に—」『民族考古学序説』同成社

「縄文時代晩期終末期の土器の胎土分析—長野県小諸市氷遺跡の氷式土器の胎土分析」『日本文化財学会 第14回研究発表要旨集』（共著）

「長野県小諸市氷遺跡の研究—中部高地における縄文時代晩期終末期の研究—」『日本考古学協会 第63回総会発表要旨』（共著）

「タイ国ピマイ寺院遺跡」『考古学研究』第43巻3号

「弥生時代前期における津島岡大遺跡とその周辺」『津島岡大遺跡』10 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第14冊

「先史考古学における GIS（地理情報システム）を利用した景観考古学の可能性」『地理情報システム学会第4回大会講演論文集』

野崎貴博

「岡山市八幡大塚2号墳の再検討」『古代吉備』第19集（共著）

「岡山平野における正方位方格地割水田の出現」『津島岡大遺跡』10 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第14冊

山本悦世

「津島岡大遺跡出土古代土器の再検討」『津島岡大遺跡』10 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第14冊

横田美香

「岡山市八幡大塚2号墳の再検討」『古代吉備』第19集（共著）

5 日誌抄

1997年

4月8日 第1回月例会議
4月21日 運営委員会開催
・平成8年度決算
・平成9年度予算案
・平成9年度事業計画
4月28日 岩崎志保助手育児休業（1998年5月31日まで）
5月1日 第2回月例会議
5月10日 福呂遺跡第1次調査開始
5月20日 福呂遺跡第1次調査終了
5月28日 管理委員会開催
・平成8年度決算
・平成9年度予算案
・平成9年度事業計画
6月2日 第3回月例会議
7月10日 第4回月例会議
7月22日 井口三智子臨時用務員採用
8月5日 第5回月例会議
8月21日 博物館実習開始 受講生25名（8月29日まで）
9月5日 第6回月例会議
9月22日 センター報18号納品
10月2日 第7回月例会議
10月31日 10周年記念冊子『今、よみがえる古代』納品
11月5日 第8回月例会議
11月8日 埋蔵文化財調査研究センター設置10

周年記念講演会・見学会開催

11月10日 岡山県立博物館へ資料貸し出し
11月21日 第9回月例会議
11月26日 福呂遺跡第2次調査開始
11月28日 宇藤桜子、井口三智子臨時用務員退職
12月5日 福呂遺跡第2次調査終了
12月9日 第10回月例会議
12月15日 年報14納品
12月18日 センター建物内ワックスがけ
12月25日 岡山県立博物館貸し出し資料返却、大掃除
12月26日 『津島岡大遺跡』9納品、御用納め

1998年

1月5日 御用始め
1月6日 第11回月例会議
1月7日 『津島岡大遺跡』9、10周年記念誌『今、よみがえる古代』、年報14、センター報20号発送
運営委員会開催
・平成11年度国立学校施設整備費概算要求事業表（案）
・岡山大学総合研究博物館構想について
・医学部校舎新営に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施について
・固体地球研究センター実験研究棟新営に伴う埋蔵文化財発掘調査結

果について 1月20日 岡山市教育委員会と調査に関する協議 1月28日 管理委員会開催 ・平成11年度概算要求事項について ・岡山大学総合博物館構想について ・平成9年度発掘調査の実施について 2月2日 第12回月例会議	2月18, 19日 文・法・経済学部南庭園測量調査 2月26日 鹿田遺跡第7次調査開始 3月2日 第13回月例会議 3月25日 センター報19号納品 3月30日 『津島岡大遺跡』10納品, 『津島岡大遺跡』10, センター報19号発送, 杉山千恵技術補佐員退職
--	---

6 1997年度までの遺物保管状況

1998年3月31日における本センターの遺物収蔵量は表2に掲げるとおりで、約30リットル収納のコンテナに換算すると約2145箱である。昨年度に比較して約11箱の増加になった。発掘調査では福呂遺跡第1・2次調査を行っており、福呂遺跡ではあわせて約11箱の遺物が出土した。また、試掘・立会調査での出土遺物は少なく、昨年度までの収蔵量と大差ない。

遺物保管状況については、土壌資料の多くは1997年度までに洗浄作業を進行させており、収蔵庫を圧迫した状況は解消されつつある。しかし、土壌以外の遺物については今後の整理分析作業により最終的な収納形態を整えるうえ、発掘調査が毎年行われており、箱数は増加することが見込まれる。これらは年々確実に増加し続けており、近い将来収納容量を超えることが予想される。

7 遺物の保存処理

本センターでは1992年度から構内遺跡から出土した木製品について、PEG（ポリエチレングリコール）含浸による保存を行っている。第1期保存処理は1992年7月から1993年11月まで、第2期保存処理は1994年6月から1996年8月まで行った。第3期保存処理は1996年12月から開始し、1996年度末までにPEG濃度を25%まで上昇させた。1997年度の濃度上昇工程は以下のとおりである。

1997年6月10日 25→40% 9月8日 40→50% 1998年1月20日 50→60%

第2期保存処理では1ヶ月半～2ヶ月毎に5%ずつ濃度上昇を行ったが、第3期保存処理では約3ヶ月毎に10%ずつ濃度上昇を行った。1997年度は60%まで濃度上昇を行い、来年度に継続することとなった。

表2 埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要

所属	種類	地 調 査 名 称	箱 数 (1箱:約30ℓ)						備 考 主要時期・特殊遺物	文 献
			総 数	土 器	石器	木器	その他	サンプル		
医病	発掘	鹿田第1次調査(外来診療棟)	608	491	6	60	1 ガラス 鉄器 銅 他	50	弥生中期～中・近世 短甲状・櫛状木器等	⑦
"	"	鹿田第2次調査(NMR-CT室)	116	90	3	20		3	弥生後期～中世,田舟・木簡等	"
医短	"	鹿田第3次調査(校舎)	131	36		90		5	古代～中世	⑩
"	"	鹿田第4次調査(配管)	3	2				1	古代, 鹿角製品	"
医病	"	鹿田第5次調査(管理棟)	119	79	1	20		19	弥生後期～中・近世	⑳
ア	"	鹿田第6次調査 (アイソトープ総合センター)	30	29.5	0.5				中世, 青銅製碗	㉑
全	"	津島岡大第1次調査(NP-1)	4			4			弥生中期～古代	③
農	"	津島岡大第2次調査 合併処理槽 排水管	18	7 6	1			4	弥生早期～弥生前期	④
学生	"	津島岡大第3次調査 (男子学生寮)	71	49	10	2		10	縄文後期～弥生, 古代～近世 石製指輪, 蛇頭状土器片	⑨
"	"	津島岡大第4次調査 (屋内運動場)	1	1					弥生早期～弥生前期 〈試掘調査遺物を含む〉	⑥
大自	"	津島岡大第5次調査 (大学院自然科学研究科棟)	89	55	2			32	縄文後期～弥生, 古代～近世 耳栓・木製櫛(縄文)	㉒
工	"	津島岡大第6次調査 (生物応用工学科棟)	63	30	1	22		10	縄文後期～近世 人形木器, アンペラ	㉓
"	"	津島岡大第7次調査 (情報工学科棟)	13	7	1			5	縄文後期～近世	"
全	"	津島岡大第8次調査 (遺伝子実験施設)	14	12.9	0.1			1	縄文後期～近世	㉔
工	"	津島岡大第9次調査 (生体機能応用工学科棟)	258	35		3		220	縄文後期～近世	㉕
全	"	津島岡大第10次調査 (保健管理センター)	55	40		5		10	弥生前期～近世	㉖
"	"	津島岡大第11次調査 (総合情報処理センター)	4	2				2	縄文後期～近世	㉗
"	"	津島岡大第12次調査 (図書館)	71	40	1	20		10	縄文後期～近世	㉘
"	"	津島岡大第13次調査 (福利厚生施設 北)	17	17					縄文後期・古墳前期・中世	㉙
"	"	津島岡大第14次調査 (福利厚生施設 南)	16	15				1	弥生～古墳	㉚
"	"	津島岡大第15次調査 (サテライトベンチャービジネ スラボラトリー)	355	25	10	20		300	縄文後期・弥生早期～中世 アンペラ	"

所属	種類	地 調 査 名 区 称	箱 数 (1箱:約30ℓ)						備 考 主要時期・特殊遺物	文 献
			総 数	土 器	石器	木器	その他	サンプル		
農業	発掘	津島岡大第16次調査 (動物実験棟)	0.3	0.3					縄文後期・弥生～中世	④
環	"	津島岡大第17次調査 (環境理工学部)	60	50	1	1		8	縄文後期～近世	"
固	"	固体地球研究センター (実験研究棟)	9	8				1	縄文早期・弥生中期・中世	④
固	"	固体地球研究センター (実験研究棟スロープ)	2.1	2			0.1		中世～近世	"
医病	試掘	鹿 田 駐車場	1	1					弥生～中世	⑤
学生	"	津島北 男子学生寮	1	0.7	0.3				縄文後期～弥生前期	"
教育	"	" 研究棟								
大自	"	" 自然科学研究科棟	1	1					縄文後期～弥生前期	⑥
事	"	津 島 外国人宿舎 (土生)	1	1					縄文～中世	⑧
理	"	津島北 身障者用エレベーター	0.3	0.3					中・近世	"
教養	"	津島南 "	0.7	0.7					縄文・中世	"
工	"	津島北 校舎	1	1					縄文～近世	⑪
農業	"	津島南 動物・遺伝子実験施設	0.7	0.7					縄文～弥生, 中・近世	"
事	"	津島南 国際交流会館	0.3	0.3					中世	"
大自	"	津島北 合併処理槽	0.2	0.2					中・近世	⑬
学生	"	津島南 学生合宿所	0.4	0.2				0.2	中世	"
教育	"	津島北 身障者用エレベーター	0.3					0.3	縄文	"
図	"	津島北 図書館	0.8	0.8					古墳～中世	"
学生	"	津島南 学生合宿所ポンプ槽	0.4	0.4					縄文～中世	⑬
資生	"	倉 敷 資源生物科学研究所	0.1	0.1					近世	"
ア	"	鹿 田 アイソトープ総合センター	1	1					中世～近世	"
事	"	津島北 福利厚生施設	0.5	0.5					弥生? ～中世	"
農	"	津島南 動物実験施設	0.1	0.1					縄文? ～近世	⑬
全	立会	'83年度	2	2					分銅形土製品	①
"	"	'84年度	1	1						②
"	"	'85年度	1	1						⑤
"	"	'86年度	0.5	0.5						⑥
"	"	'87年度	0.5	0.5						⑧
	分布	'89年度 三朝・本島	0.3	0.3						⑬
全	立会	'91年度 '92年度	0.3	0.3						⑳ ㉔
"	"	'93年度 '94年度 '95年度 '96年度 '97年度	0.6	0.6						㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙
総 箱 数			2144.4	1146.2	37.9	267	1.1	692.2		

※文献番号は附表3・4に対応する。文献④は本年報15を指す。

8 10周年記念事業

本センターは1997年11月26日をもって設置10年を経過した。そこで10年の活動を記録し、その成果を広く普及することを目的に「今、よみがえる古代」と題して講演会、遺跡見学会を企画、実施した。また、同名の冊子『今、よみがえる古代』を刊行した。ここでは講演会、遺跡見学会の概要を中心にその成果を記しておきたい。

a. 記念講演会

記念講演会は1997年11月8日に大学院自然科学研究科棟2階講義室で開催した。小坂二度見岡山大学学長の挨拶のあと、狩野久岡山大学文学部教授に「『津島』の地名の由来」、稲田孝司岡山大学埋蔵文化財調査研究センター長に「縄文人のくらしードングリ穴と落とし穴ー」と題して講演していただいた。

b. 遺跡見学会

遺跡見学会は記念講演会終了後、午後1時に岡山大学学生会館を出発した。見学コースは大学北側の半田山山塊にひろがる古墳・城跡をめぐるコースと、大学南側の弥生・古墳時代の遺跡をめぐるコースの2班に分かれて行った(図20)。参加者は各コースとも24~25名あり、学内関係者の参加も多くみられた。各コースともセンター

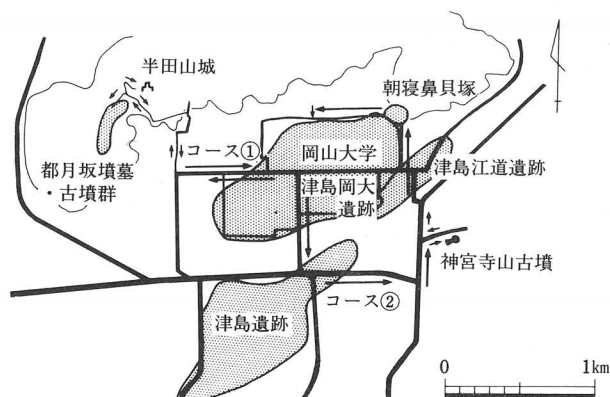


図20 遺跡見学会のコース

助手が案内し、岡山大学構内遺跡と大学周辺に広がる遺跡との関係を説明した。

記念講演会、遺跡見学会とも大変好評であった。このような普及活動を継続的に行うことによって、埋蔵文化財調査研究センターの業務や研究成果を学内外の多くの人に知ってもらう機会を設け、今後のセンターの業務の幅を広げていく必要がある。(野崎)

9 資料の貸し出し

岡山県立博物館 新発見考古速報展『吉備 大地からのメッセージ』

貸し出し資料名

木製短甲1, 木製楯1, 耳栓2, 石製指輪1, 櫛1, 石包丁1, 縄文土器(深鉢)2, ガラス滓一括, 炉1, 写真原版4

第3章 岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

第1節 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規程

1 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程

(設置)

第1条 岡山大学（以下「本学」という。）に岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）を置く。

(目的)

第2条 センターは、本学の敷地内の埋蔵文化財について、次の各号に掲げる業務を行い、もって埋蔵文化財の保護をはかることを目的とする。

- 一 埋蔵文化財の発掘調査に関すること。
- 二 発掘された埋蔵文化財の整理及び保存に関すること。
- 三 埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成等に関すること。
- 四 その他埋蔵文化財の保護に関する重要な事項

(自己評価)

第2条の2 センターは、岡山大学学則（昭和26年岡山大学規程第32号）第1条の2の定めるところにより、センターの係る点検及び評価（以下「自己評価」という。）を行うものとする。

- 2 前項の自己評価を行うため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会（以下「自己評価委員会」という。）を置く。
- 3 自己評価委員会に関する規程は、別に定める。

附 則

この規程は、平成5年2月25日から施行する。

○岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの研究活動等についての点検及び評価を行うこととするため。

(センター長)

第3条 センターにはセンター長を置く。

- 2 センター長は、専門的知識を有する本学の教授の中から学長が命ずる。
- 3 センター長は、センターに関する業務を掌理する。
- 4 センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(調査研究室)

第4条 センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。

- 2 調査研究室に室長、調査研究員及びその他の必要な職員を置く。
- 3 室長は、専門的知識を有する本学の教官の中から学長が命ずる。
- 4 室長は、センター長の命を受け、センターの業務を処理する。
- 5 室長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 6 調査研究員及びその他の職員は、上司の命を受け、センターの業務に従事する。

(調査研究専門委員)

第5条 センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るため、調査研究専門委員（以下「専門委員」という。）を置く。

- 2 専門委員は、本学の教官の中から学長が命ずる。
- 3 専門委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(管理委員会)

第6条 本学に、センターの管理運営の基本方針を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会（以下「管理委員会」という。）を置く。

2 管理委員会に関する規程は、別に定める。

(運営委員会)

第7条 センターに、センターの運営に関する具体的な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会に関する規程は、別に定める。

(事務)

第8条 センターの事務は、施設部企画課において処理する。

(雑則)

第9条 この規程に定めるもののほか、センターに関し必要な事項は、学長が別に定める。

附 則

1 この規程は、昭和62年11月26日から施行する。

2 この規程施行後最初に任命されるセンター長、室長及び専門委員の任期は、第3条第4項、第4条第5項及び第5条第3項の規定にかかわらず、昭和64年3月31日までとする。

○設定理由

岡山大学の敷地内の埋蔵文化財の発掘調査などの業務を行い、もって埋蔵文化財の保護を図るため、学内施設として、新たに岡山大学埋蔵文化財調査研究センターを設置すること及びその組織等必要な事項について定めるため。

2 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会規程

(趣 旨)

第1条 この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（昭和62年岡山大学規定第48号）第6条第2項の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会（以下「管理委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 管理委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの管理運営の基本方針その他重要な事項を審議する。

(組 織)

第3条 管理委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

- 一 学長
- 二 各学部及び教養部長
- 三 自然科学研究科長
- 四 資源生物研究所長
- 五 附属図書館長
- 六 各附属病院長
- 七 地球内部研究センター長
- 八 学生部長
- 九 医療技術短期大学部主事
- 十 事務局長

十一 埋蔵文化財調査研究センター長

(委員長)

第4条 管理委員会に委員長を置き、学長をもって充てる。

2 委員長は、管理委員会を召集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

(幹事)

第6条 管理委員会に幹事を置き、庶務部長、経理部長及び施設部長をもって充てる。

(庶務)

第7条 管理委員会の庶務は、施設部企画課において処理する。

附 則

この規程は、昭和62年11月26日から施行する。

○設定理由

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの管理運営の基本方針等を審議するためにおく岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会に関し、必要な事項を定めるため。

3 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規程

(趣 旨)

第1条 この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（昭和62年岡山大学規定第48号）第7条第2項に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 運営委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の運営に関する具体的な事項を審議する。

(組 織)

第3条 運営委員会は、次の号に掲げる委員で組織する。

- 一 埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）
- 二 本学の教授のうちから学長が命じた者若干名
- 三 センターの調査研究専門委員から学長が命じた者1人
- 四 センターの調査研究室長
- 五 施設部長

2 前項第2号の任期は、1年とし、再任を妨げない。

(委員長)

第4条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会を召集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

(庶 務)

第6条 運営委員会の庶務は、施設部企画課において処理する。

附 則

- 1 この規程は、昭和62年11月26日から施行する。
- 2 この規程施行後最初に任命される第3条第1項第2号の委員の任期は、同条第2項の規定にかかわらず、昭和64年3月31日までとする。

○設定理由

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの運営に関する具体的な事項を審議するためにおく岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会に関し、必要な事項を定めるため。

4 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会規程

(趣 旨)

第1条 この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程(昭和62年岡山大学規程第48号)第2条の2第3項の規定に基づき、岡山埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会(以下「委員会」という。)の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター(以下「センター」という。)に係る点検及び評価の実施に関し、必要な事項を審議する。

(組 織)

第3条 委員会は次の各号に掲げる者で組織する。

- 一 埋蔵文化財調査研究センター長(以下「センター長」という。)
- 二 埋蔵文化財調査研究センター調査研究室長
- 三 センターに勤務する教官のうちから若干名
- 四 埋蔵文化財調査研究センター運営委員会委員のうちからセンター長が委嘱した者若干名
- 五 施設部長

2 前項に定める委員のほか、センター長が必要と認めた者を加えることができる。

(委員長)

第4条 委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

(会 議)

第5条 委員長は委員会を招集し、その議長となる。

2 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

(庶 務)

第6条 委員会の庶務は、施設部企画課において処理する。

(雑 則)

第7条 この規程に定めるもののほか、委員会に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

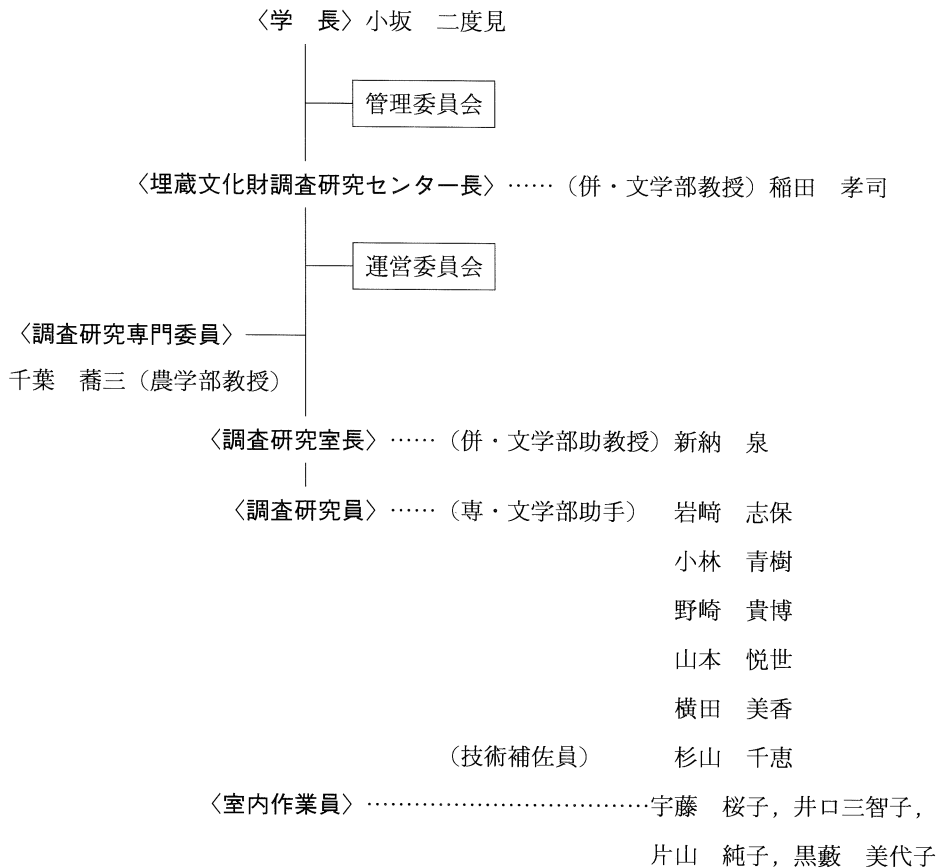
この規程は、平成5年2月25日から施行する。

○設定理由

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの研究活動等についての点検及び評価の実施に関する必要な事項を審議するために置く岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会について、必要な事項を定めるため。

第2節 1997年度埋蔵文化財調査研究センター組織

1 センター組織一覧



2 管理委員会

委 員

学 長	小坂 二度見	文化科学研究科長	岩間 一雄
文学部長	成田 常雄	自然科学研究科長	岩見 基弘
教育学部長	松畑 熙一	資源生物科学研究所長	青山 勲
法学部長	植松 秀雄	附属図書館長	神立 春樹
経済学部長	坂本 忠次	医学部附属病院長	大森 弘之
理学部長	佐藤 公行	歯学部附属病院長	村山 洋二
医学部長	産賀 敏彦	固体地球研究センター長	久城 育夫
歯学部長	松村 智弘	医療技術短期大学部長	遠藤 浩
薬学部長	篠田 純男	学生部長	伊澤 秀而

工学部長	中島 利勝	事務局長	藤井 武
農学部長	内田 仙二	埋蔵文化財調査研究センター長	稲田 孝司
環境理工学部長	河野 伊一郎		

幹 事

庶務部長	厚谷 彰雄	経理部長	黄楊川英了
施設部長	井内 敏雄		

審議事項

1997年 5 月28日 平成 8 年度埋蔵文化財調査研究センター決算について
 平成 9 年度埋蔵文化財調査研究センター予算について

1998年 1 月28日 平成11年度概算要求事項について
 岡山大学総合研究博物館構想について
 平成 9 年度発掘調査の実施について

3 運営委員会

委 員

センター長	稲田 孝司	医学部教授	村上 宅郎
文学部教授	狩野 久	農学部教授	千葉 喬三(調査研究専門委員)
理学部教授	柴田 次夫	事務局	井内 敏雄(施設部長)
経済学部教授	建部 和広	埋蔵文化財調査研究センター	新納 泉(調査研究室長)

審議事項

1997年 4 月21日 平成 8 年度埋蔵文化財調査研究センター決算について
 平成 9 年度埋蔵文化財調査研究センター予算案について

1998年 1 月 7 日 平成11年度国立学校施設整備費概算要求事業表(案)について
 岡山大学総合研究博物館構想について
 医学部校舎新営に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施について
 固体地球研究センター実験研究棟新営に伴う埋蔵文化財発掘調査結果につ
 いて

第4章 1997年度活動のまとめ

本年度は稲田孝司センター長以下、年度当初は助手5名、技術補佐員1名の業務体制で構内遺跡の調査及び整理分析作業を行った。5月からは助手1名が特別休暇・育児休業をとり、助手4名、技術補佐員1名の体制となった。今年度は年度当初には調査が予定されていなかったが、5月に三朝地区固体地球研究センター実験研究棟新営工事において遺跡を不時発見するに至り、急遽発掘調査を行った（福呂遺跡第1次調査）。実験研究棟新営工事は既に着工しており、周辺の調査は工事工程にあわせて7、11、12月に行った（福呂遺跡第2次調査）。また、年度後半になって医学部基礎医学棟新営工事が着工されることとなり、1998年2月から調査を開始した（鹿田遺跡第7次調査）。鹿田遺跡第7次調査は1998年度も調査を継続している。

福呂遺跡第1次調査は、工事範囲の半分が既に破壊された状況であったが、工事による掘削を免れた部分と第2次調査地点では遺構・包含層が良好に残存していた。包含層は古代～中世、弥生、縄文の3層を確認し、各層で溝、ピット群、大形土坑、埋設土器、炉跡などの遺構を検出した。これまでの分布調査では丘陵上に古墳数基を確認しているが、縄文早期、弥生、古代・中世の遺構は確認していない。縄文土器は九州に分布の中心がある土器であり、縄文時代の交流を考えるうえで重要な資料である。また、古代・中世の遺構が良好な状態で検出されたことは、三朝町に所在する三徳山三仏寺との関係を考えるうえで重要である。今回の調査は三朝町の地域史を考えるうえでも重要な資料を提供したといえよう。鹿田遺跡第7次調査は1997年度末から調査に着手し、近世の溝と畦畔を検出した。明確な水田遺構は鹿田地区では各時期を通して初めて検出されたものである。今後の調査でも重要な知見が得られるものと期待される。

室内の整理作業の成果としては、『津島岡大遺跡』9、『津島岡大遺跡』10の2冊の報告書の刊行がある。工学部生体機能応用工学科棟の調査（1992年度）と、福利厚生施設南棟の調査（1995年度）の成果をまとめたものである。定期刊行物では構内遺跡調査研究年報14、センター報18・19号を刊行した。

本年度は本センター設置10周年にあたり、記念事業として講演会・遺跡見学会を行い、10年の活動をまとめた『今、よみがえる古代』を刊行した。講演会、遺跡見学会とも多くの参加者があり、センターの活動を広く周知するとともに理解を深めることができたと思われる。

本年度は発掘3件（内1件は1998年度に継続）、試掘2件の調査を実施し、2冊の報告書を刊行したうえ、10周年記念事業を行うなど、その活動成果は充実していた。また、保存処理作業など、かねてからの懸案事項も解消しつつある。今後も学内外を問わず調査成果の公開など普及・啓蒙活動を続け、埋蔵文化財に対する更なる理解の深化をはかる必要がある。（野崎）